

to Mr. Sh. Isawa
Institute of Music
Tokio Japan

Alex. J. Ellis

[手書き]

〔諸向往復書類〕明治十八年

伊澤修二はこのような海外の博覧会に参加できたことに対し「音楽取調上ニ於テ望ヲ将来ニ属スベキ一新途ヲ開キタルモノト云ベシ」と述べている〔音監開申書類〕明治十七年。

博覧会への出品は、このうち東京音楽学校になってからも二度行っている。一度目は明治二十二年五月開催のフランス・パリ万国博覧会、二度目は二十六年五月開催のシカゴ・コロンブス世界博覧会で、いずれも明治十八年秋のロンドン発明品博覧会と同様の物が出品されている。

なお、シカゴの博覧会閉場後（九月二十九日）同会の事務官は各国役員を招待して晩餐会を開き、その際日本人による〈君が代〉〈紀元節〉〈六段〉および各国の音楽演奏を披露し、招待者の賛辞を得たということである〔博覧會關係書類〕明治二十二年、二十六年。

九 音楽取調掛の演奏会

(一) 「明治十四年七月七日音楽取調掛期末試業略記」

ここで歌われている唱歌はすべて『小學唱歌集初編』に含まれているもので、この試験が実施された当時、唱歌集作成の仕事は選曲を終え、最終的な完成に至る段階にあった。いわば期末試験演奏の場をかりて、でき上がった歌を歌わせ、その適否を検討する目的もあつたのであろうか。

唱歌ノ部

樂器ヲ用キズシテ唱フ分

第一図第一曲 カヲレ

第二曲 ハルヤマ

下第三図第七曲 ハルハハナミ

上第二図第六曲 ワカノウラ

第四図第十曲 ハルカゼ

第五図第十一曲 ハルミニユキマセ

洋琴ヲ用キテ唱フ分

第十図第十七曲 蝶々

第十二図第十九曲 閨の板戸

風琴ヲ用キテ唱フ分

第十四図第廿二曲 眠レヨ子

第十五図第廿三曲 君が代〔現行の〈君が代〉とは別のもの〕

号外第二曲 玉ノ宮居

第三曲 隅田河原

第四曲 大和撫子

琴及胡及ヲ用キテ唱フ分

第六図第十三曲 見渡セバ

第八図第十五曲 春の弥生

第十三図第二十曲 螢〔螢の光のこと〕

ヴァイオリン、テナ、ヴィオレンセロ、横笛、クラリオネット、琴

ヲ用キテ唱フ分

第十四図第二十一曲 若紫

第十六図第廿四曲 思ヒ出レバ

ヴァイオリン、テナ、ヴィオレンセロ、横笛、クラリオネットヲ用

キテ唱フ分

号外図第一曲 雨露ニ

第五曲 富士山

第六曲 朧

奏樂の部

洋琴演習教則本中試験〔傳習人〕

風琴演習教則本中試験〔 〃 〕

洋琴二人連弾〔 〃 〕

洋琴三人連弾〔 〃 〕

管絃樂演習〔助教および傳習人〕

當掛助教

三等伶人 東儀彭質

同 上眞行

四等伶人 奥好義

五等伶人 辻則承

傳習人

三等伶人 山井基萬

同 東儀俊慰

同 林廣繼

四等伶人 多久隨

五等伶人 芝祐夏

六等伶人 安倍季功

第一 富士山

第二 ヘールコラムビア

第三 朧〔「ローレライ」の作者 Friedrich Silcher のよみと思われる〕

第四 エルピンプルツ

第五 澳斯太里亞国歌〔「ハイドンの弦樂四重奏曲「皇帝」より〕

第六 若紫

第七 雨露

第八 ウェルシ国歌〔ウェールズ国歌〕

〔巻紙三枚、手書き〕
〔音楽取調掛日誌その他〕

(二) 「明治十五年一月三十日及三十一日昌平館ニ於テ音楽取調

報告ノ節唱歌并音楽演習手續書」

一月三十日

午後第一時 諸員着坐

音楽取調掛助教及傳習人等奏樂

洋風管絃樂二曲〔指揮役メーソン〕

大平曲〔各種管絃合奏〕

ウエイルス国歌〔同〕

音楽教師メーソン氏唱歌并音楽進歩ノ情况ヲ報告ス

午後第一時半

東京師範學校附属小學上下等諸級生徒進入〔洋琴進行曲〕

上下等諸級生徒〔合百拾五名〕

唱歌掛圖第一曲ヨリ第十二曲迄ノ練習〔箏・胡弓合奏〕〔箏・山

勢松韻、鳥居悦、胡弓・林蝶〕

下等諸級生徒唱歌 四種〔百拾五名〕

見渡せば〔箏胡弓合奏〕〔同上〕

春の彌生〔風琴〕〔メーソン〕

幼穉唱歌 二曲〔進メ進メ、マストラヲ武士〕〔洋琴〕〔同上〕

上等諸級生徒唱歌 三種〔九十一名〕

うつくしき我子(風琴)〔メーンソ〕

閨の板戸 (同) 〔同上〕

墨田河原(洋風管絃樂合奏)

右終テ退出(洋琴進行曲)

午後第二時半、音樂取調掛傳習人奏樂

洋琴 六曲

獨彈曲 四曲〔鳥居悦、林蝶、加藤定、谷澤久良〕

二人聯彈曲 一曲〔千村筆、吉田キサ〕

三人合彈曲 一曲〔遠山杵、米田蝶、幸田延〕

午後第三時

女子師範學校生徒進入〔本科七十九名、豫科百四名〕(洋琴進行曲)

音樂取調掛助教及傳習人之ニ合ス

單音唱歌 三種

五日ノ風(洋琴)〔メーンソ〕

鏡ナス (同) 〔同〕

燕 (同) 〔同〕

複音唱歌 一種

隅田河原(風琴)〔同〕

三重音唱歌 一種

薰ニ知ラル、(風琴)〔同〕

高等單音唱歌 二種

榮ユク御代(洋風管絃樂器合奏)

富士山 (同) 〔同〕

右終テ退出

午後第四時 休憩(來客ニ茶菓ヲ供ス)

午後第四時半 音樂取調掛員山勢松韻等奏曲本邦俗樂等

新晒(洋琴箏合奏)〔箏・山勢松韻、三味線・加藤定〕

午後第五時一同退散

一月三十一日

午後第一時諸員 諸員着坐

音樂取調所助教及傳習人等合奏洋琴管絃樂 一曲

クワルテット(各種管絃合奏)

音樂取調掛長伊澤修二音樂取調ノ現況ヲ報告ス〔第二節五を参照〕

午後第一時二十分

東京女子師範學校附属幼稚園生徒進入〔百十三名〕(洋琴進行曲)

唱歌 三種

數ヘ歌 五回(ヴァイオリン)〔メーンソ〕

進メ進メ (同) 〔同〕

マスラオ武士(同) 〔同〕

我門 (同) 〔同〕

右終テ退出(洋琴進行曲) 〔同〕

音樂取調掛傳習人奏曲

洋琴 六曲

獨彈(四曲)〔加藤定、遠山杵、米田蝶、市川道〕

二人連彈(一曲)〔市川道、谷澤久良〕

三人合彈(一曲)〔林蝶、千村筆、吉田キサ〕

午後第二時

午後第二時

東京女子師範學校附属小學生徒及學習院小學生徒進入（洋琴進行曲）

兩校生徒、唱歌掛圖第一曲ヨリ第七曲迄ノ練習〔箏・山勢松韻、千村筆、胡弓・加藤定〕

學習院生徒唱歌〔百廿八名〕

見渡せは（箏胡弓）〔箏・山勢松韻、胡弓・吉田キサ、加藤定〕

春の彌生（洋琴）〔メーンソ〕

若紫（同）〔同〕

君か代（洋風管絃樂）

東京女子師範學校附属小學生徒唱歌〔百四十三名〕

蝶々（洋琴）〔メーンソ〕

霞か雲か（同）〔同〕

薫に知らるる（風琴）〔同〕

大和撫子（洋風管絃樂器合奏）

右終テ退出（洋琴進行曲）

午後第二時四十五分

音樂取調掛員芝葛鎮等奏曲

本邦雅樂〔音取〕蘇莫者〔二反〕〔三管二絃合奏〕〔箏多・久隨、辻則承、筆樂東儀彭質、安部季功、笛・山井基萬、芝祐夏、琵琶・林廣繼、箏・芝葛鎮〕

午後第三時 休憩（來客ニ茶菓ヲ供ス）

午後第三時半

音樂取調掛長伊澤修二取調掛諸員ト共ニ本邦及西洋各種ノ音律ヲ

解説ス〔第二節六の（二）を参照〕

希臘古樂〔箏・辻則承、筆樂・東儀彭質、笛・山井基萬、琵琶・上眞行、箏・奥

好義〕

本邦雅樂ノ三管二絃ヲ用キテ凡二千年前ノ希臘曲アポロノ讚歌ヲ奏シ之ヲ解説ス

本邦俗樂

箏三味線胡弓洋琴等ニヨリ各種ノ歌曲ヲ用キテ之ヲ解説ス

童謠（三味線）數ヘ歌

箏曲（箏洋琴）シラブル琴〔箏・山勢松韻、洋琴・辻則承〕

同（洋琴）六段〔山勢松韻、奥好義〕

長唄（三味線箏洋琴）村雲〔三味線・加藤定、洋琴・奥好義、箏・山勢松韻〕

勢松韻〕

音樂取調掛内田彌一唱歌

西洋長音階 洋風管絃樂器及箏ヲ用キテ之ヲ解説ス

我日ノ本

本邦雅樂律旋 三管二絃ヲ用キテ解説ス

〔音取〕越天樂〔二反〕〔箏・林廣繼、多久還、筆樂・東儀彭質、安部季功、笛・上眞行、芝祐夏、琵琶・辻則承、箏・山井基萬〕

本邦雅樂呂旋 三管二絃ヲ用キル事前ニ同シ

〔音取〕酒胡子〔二反〕〔箏・林廣繼、辻則承、筆樂・東儀彭質、安部季功、笛・山井基萬、奥好義、琵琶・芝祐夏、箏・多久還〕

音樂取調掛其他諸員共同大合奏

本邦雅俗及西洋管絃樂器ヲ悉ク混用シテ合奏ス〔箏・辻則承、筆樂

・安部季功、箏・芝葛鎮〕螢ノ光

午後五時一同退散

〔手書き〕

〔取調掛日誌その他〕

唱歌略説〔前記の演習会の解説書で、伊澤修二自筆によるものである〕

一月三十日

洋風管絃樂

太平曲

此曲ハ千八百七十二年合衆國ニ於テ萬國太平協會ヲ開キタル時米
人ケラ^ル氏ノ太平ノ精魂ヲ頌シ作レルモノニシテ原歌ハ有名ナル
ドクトル、ホルムス、氏ノ作ニ出ツ其意ハ太平ノ氣ヲシテ長ク國家
ヲ保護セン事ヲ祈ルナリ

ウエイルス、國家

此曲ハ古來ウエイルス國ニ傳ハリ作者ヲ詳ニセス其意ハ士氣ヲ鼓
動シ命ヲ棄テ戰場ニ赴キ國家ノ為メニ忠ヲ盡ス事ヲ勸ムルニアリ

—東京師範学校附属小学生徒唱歌

かをれ

- かをれにほへそのふのさくら
- とまれやどれちくさのほたる
- まねけなひけ野はらのすすき
- なげよたてよかはせの千鳥

春山

- はるやまにたつかすみ
- あきやまにわたるきり
- さくらにもみちにも
- きぬきするこゝちして

柳すゝき

- なひけやなき河瀬の風に
- まねけすゝきはなの風に

いはへ

- いはへく君か代いはへ

- しけれくふたばの小松

千代に

- 千代にく千世ませ君は

- いませくわか君ちよに

和歌の浦

- わかの浦わに夕しほみちくれは

- きしのむらら鶴あしへになき渡る

春は花見

- 春は花見みよしのおむろ

- あきは月見さらしなをくら

鶯

- うくひすきなけうめさくそのに

- かりがねわたれきりたつそらに

野邊に

- のへになひくちぐさは四方の民のまごゝろ

- はまにあまるまさごは君が御世のかずなり

春風

- 春かせそよふくやよひのあした

- あきかぜみにしむはつきのゆふべ

- 弥生は野山のはなさくさかり

はつきはみそらの月すむよごろ

櫻もみぢ

○春見にゆきませ吉野、桜

秋みてつけませ龍田のもみぢ

○よしのはさくらの花さくみやま

立田はもみぢのちりしくながれ

花さく春

○花さく春のあしたのけしき

かをる雲のたつこゝちして

○秋はきをはな花さきみたれ

もとも末もつゆみちにけり

以上十二曲ノ歌ハ皆稻垣千穎ノ作ナリ是レ唱歌ノ尤初歩ナルモノニシテ唯第二音ヨリ第六音迄ノ正律ヲ生徒ニ學ハシメンカ為ノ作歌ナレハ其譜ニ隨テ簡短ナル言辭ヲ填充スルニ過キス固ヨリ深意アルニ非ス

見渡せば

○見渡せばあを柳花ざくらこきまぜて都には路もせに春の錦をぞた

てもなくぬきもなくさほ姫のおりにける

見渡せば山辺には尾上にも麓にもうすきこき紅葉はの秋の錦をぞ

立田姫おりなして露霜にさらしける

第一歌ハ以前音楽取調掛ニ出勤セシ柴田清熙ノ作ニシテ古今集春ノ部ニ載タル素性法師ノ歌ニ「見渡せば柳櫻をこきまぜて」云々トアルヲ句ヲ足シ意ヲ取りテ楽譜ニ合セタルモノ也

第二歌ハ第一歌ニ擬シテ稻垣千穎ノ作レルモノニテ春秋二季ノ景

色ヲ取合セタルナリ

樂譜ハ佛國ノ學士ニシテ音樂ニ著名ナルルーソウ氏カ睡眠中ニ作リタル曲ニシテ廣ク諸邦ニ行ハル、モノ也其意ハ雅正婉美ナル感情ヲ暢フルモノナリ

春の弥生

○春の弥生の曙に四方の山辺を見渡せば花ざかりかも白雲のかゝら

ぬ峯こそなかりけれ

○花橘も匂ふなり軒のあやめも香る也夕暮さまの五月雨に山ほとと

ぎす名乗るなり

○秋の初めになりぬれば今年もなかばは過にけり我よふけゆく月か

けの傾く見るこそ哀れなれ

○冬よさむの朝ぼらけ契りし山路は雪ふかし心の跡はつかねとも

思ひやるこそ哀れなれ

此歌ハ慈鎮和尚ノ作レル今様ノ歌ニシテ更ニ増刪變改ヲ加ヘズ直ニ採リ用キシモノ也如何トナレハ此ハ古今名家ノ佳作ニシテ幽玄餘情有ルモノナレハ兒童ニ記憶セシメントノ意ナリ

樂譜ハ作者ヲ詳ニセサレトモ元來天竺國ヨリ出テ歐洲諸國ニ傳ハリ現今ニ至リテハ殆全地球ノ各國皆之ヲ歌フト云フモ可ナリトス然シテ其出處亜細亞ニ在ルヲ以テ我國語ニハ最適當ナル處アリ其音律ニ至リテモ亦我神僊調ノ呂旋ニ異ナル處ナシ

進め進め

○すゝめくあしとくすゝめとまれく一度にとまれとまるもゆく

もをしへのまゝにたつもゐるもをしへのまゝにさく花もなく鳥も
おもしろき花園やすゝめくあしとくすゝめ

○まなへくつとめてまなへならへくたゆますならへまなひの道
をたへせずならへよむもかくもをしへのままによむふみもかくも
しもおもしろきうひまなひまなへくつとめてなまへ

此歌ハ取調掛加部嚴夫ノ作ニシテ第一歌ハ起居進退共教師ノ指揮
ニ從ヒ決シテ背キ忤フ事ナカレト云フナリ此歌元來運動ノトキナド
唱フ所ニシテ即チ進行ノ曲ナレバ花鳥ナドノ眼ヲ悞マシムル状ヲイ
ヒテ花園杯ニ遊歩スルトキノ歌ナル事ヲ知ラシメシナリ第二歌ハ初
學ノ徒讀書習字ナド撓ミナク勉メヨト奨励スルノ言調ニシテ即チ第
一歌ニ對シ教師ノ命令ニ從ヘトイヘルナリ
樂譜ハ最古代ノモノニテ何者ノ作タルヲ知ラス其意ハ小兒ノ列ヲ
ナシテ步行シ相唱和シテ樂ム様ヲ顯ハシタルモノナリ

心は猛く

○心は猛く気はつよく疑ひなくてよく学へ出逢へる事に動かぬ人を
ますらをとしもいふぞかし

○力もつよくいさましく後れすすゝめ子供らよ出逢へる敵に恐れぬ
人をものゝふとしもいふぞかし

此歌ハ取調掛里見義ノ作ニシテ幼稚園生徒ニ唱ハシムル處ナリ凡
人ハ幼少ノ時ヨリ耐忍力ヲ養成セザレハ何レノ業ニ従事スルモ功ヲ
遂ル事能ハズ故ニ心ヲ勇猛ニシ氣ヲ剛強ニシテ狐疑躑躅ノ念ヲ去リ
教師ノ命令ヲ能ク体認シテ学ハン事ヲ專ラ教ヘタルモノ也出逢ヘル
事トハ事々物々ニ當リ更ニ畏縮セサルヲ云フ終句ニ大丈夫トシモ言

ゾカシト結ヒテ一層幼兒ノ憤發心を励マシタルナリ

第二歌モ同前ナレド聊趣意ヲ異ニシテ君上ヲ護シ國威ヲ張ルハ兵
ノ強壯ニ在リ故ニ力強ク勇マシク進ミテ人ニ後レズ強敵ヲ恐レズヨ
リ耐忍スル者ヲ武士ト言フゾト云ヒテ励マシタル也

樂譜ハ米國有名ノ音樂家ローエルメーソン氏ノ作ニシテ其意ハ物
ニ逢フテ屈セスシテ益々勉勵スル事ヲ勸メタルナリ

うつくしき

○うつくしき我子やいづこうつくしき我かみの子は弓とりて君のみ
さきに勇み立て別れ行にけり

○うつくしき我子やいづこうつくしき我なかの子は太刀はきて君の
御許に勇み立て別れ行にけり

○うつくしき我子やいづこうつくしき我末の子は鉾とりて君の御後
に勇み立て別れゆきにけり

此歌ハ稻垣千穎ノ作ニシテ君上ニ隨ヒ征討ナドニ行タル時ノ情況
ヲ述ヘタルモノニテウツクシキハ愛スヘシト云ハンガ如シ愛ス可キ
我子ハ君前ニ先立ち勇ミ進ミテ出陣セリト云ヒテ留守ナル父母ノ國
事ニ尽力セルヲ喜悅シタル様ヲ言ヘリ第一首君の御先、第二首、君
ノ御許、第三首君ノ御後、ト云ヒ又カミノ子、中の子、末ノ子、又
弓取りテ、太刀帯キテ、鉾トリテ、ナド云ヒタルハ聊文ヲ變ヘタル
迄ニテ別ニ深意アルニ非ス

樂譜ハ古來蘇格蘭土ニ傳ハリテ戰場ニ赴キタル人ヲ思フ歌ナリ

閨の板戸

○ねやの板戸のあけゆく空に朝日のかけのさしそめぬればねくらを
出る百八十鳥は霞の中に友よびかはし夢みる蝶もとく起出てむれ
つゝ花に舞ひ遊ふなりあさいねする身の其怠りを諫むるさまなる
春のあけぼの

此歌ハ稻垣千穎ノ作ニシテ春暁暖和ノ光景ヲ述タリ春暁我居室ノ
間隙ヨリ光リ指シ入リテホノボト明ヌレバ百鳥モ己カ栖カラ出テ
霞中ニ弄吟シ我友ヲ喚カ如ク草葉ニ眠レル蝶モ花ニ戯レ露ヲ吸ヒ心
善ゲニ樂メル有様ハ偶小兒ノ朝寐シテ曉モ知ラサル怠懈者ヲ喚起セ
ト訓誨スルカ如キ情態アリト云ヒタルニテ甚タ幼年生徒ドモノ朝寐
シテ学校等ニ遅々スル者ヲ誡メタル者ニテ風流ニ寄セテ春ノ曙ガ深
切ニ諫ムルカ如キ景色有リト云ヒタルナリ

樂譜出處ヲ詳ニセス其意ハ朝ノ様ヲ形状シタルナリ

墨田河原

○隅田川原の朝ぼらけ雲も霞も香るなり水のまにく／＼船うけて花に
遊ばんちらぬまに

○隅田川原の秋のよは水もみそらもすみ渡る風のまにく／＼船うけて
月に遊はんよもすがら

○隅田川原の冬の空世は白妙にうつもれて木々のこと／＼花さきぬ
雪に遊ばんきえぬまに

此歌ハ里見義ノ作ニシテ雪月花ノ折ニフレタル遊覽ハ都下ニテ隅
田川ヲ第一トスレハ之ニ遊ヘル悠々閑雅ノ意ヲ含メタルナリ花ハ曙
ヲ賞シ散リ易キヲ恐ルモノナレバ雲モ霞モ香レル迄ニサキ満タル
花ノ散ラヌ間ニ早く小船ヲ浮ヘ逍遙ス可シト言ヒタルナリ

第二歌モ同意ニシテ空モ水モ一樣ノ看ヲ做シタル清霄ニ清風徐々
ト吹来レリ終夜之ヲ賞ス可シト云意ナリ

第三歌モ同意ニシテ地上ハ銀世界ト変シ樹樹皆華ヲ粧ヒタル暫時
ノ間ニ遊行ス可シト云ヒタルナリ

寓意幼年生徒ノ修行ス可キ年月ハ花ノ散ラヌ間、月ノ曇ラヌ間、
雪の消エヌ間、ニモ譬フベク實ニ暫時ノ事ナレバ此時ヲ空シク経過
セサラン事ヲ希望セルナリ

樂譜ハグレゴリヤン、チャント、トテ古代羅馬ノ寺院ニテ歌ヒタル
短曲ヲ集メテ一曲トナシタルモノニテ其意ハ心ヲ清潔ニスルニ在リ

東京女子師範生徒及音樂取調掛

助教傳習人等唱歌

五日の風

○五日の風もとをかの雨も時に随ふわか君か世やにしの國より高麗
百濟よりより来る人も御代いはふなり

○豊葦原のみつほのくには千世萬世も動きなき國わか君か世はちよ
よろつよも動きなきみよいはへもろひと

此歌ハ加部嚴夫ノ作ニシテ第一歌ハ太平ヲ樂ムノ哥ナリ五風十雨
ハ太平ノ祥ニシテ陰陽則ニタガハズ上下輯睦シテ治國平天下ナル故
皇國人ハ勿論外國ノ人迄モ太平ヲ樂シミ天皇陛下ノ萬歳ヲ祝シ奉ル
ヨト云フナリ西ノ國ト云ヒ高麗百濟ト云者ハ句ノアヤニシテ單ニ外
國人ト云ガ如シ

第二哥モ亦昭代ヲ祝スルノ哥ニシテ豊葦原ノ瑞穂ノ國ト云フハ我
國ノ美稱ナリ即チ我邦ハ外国革命ノ國ト差ヒテ皇統一系万古不易ノ

国体ナレハ決シテ動カスヘカラザル国ナリ動カスベカラザル聖代ナリ故ニ我同胞兄弟ハ斯太平ヲ樂シミ斯太平ヲ樂ムノミナラズ尊王愛國ノ心ヲ鞏ウシ益國威ヲ海外ニ耀カサン事ヲ希望スルノ意ヲ寓スル者ナリ

樂譜ハ蘇格蘭土ノ曲ニシテロベルトアランノ作ナリ其原意ハ人民ノ衣食足りテ清世ヲ樂ムニアリ

鏡なす

○鏡なす水のみとりの影うつる柳のいと枝をたれ氣晴ては風新柳の髪を梳り氷消えては波旧苔の髭を洗ふとかや實に面白の気色やなけにおもしろのけしきやな

此哥ハ里見義ノ作ナリ然レドモ其ヅク処ハ實盛ノ謠曲一節ヲ撰出シ前後ノ詞ヲ加ヘテ新ニ一曲ト成シ、ナリ尤此詩ハ都良香ノ作ニシテ對句ヲ鬼神ニ授リタルナド世ニモテハヤス作ニテ新春ノ景色ヲ善ク寫セル詩ナリ哥意ハ水清クシテ鏡ノ如キ池中ニ翠柳ノ枝ヲ垂レタルヲ觀テ此詩情ヲ追想シテ古人ノ句ヲ詠スルノ意味也ゲニ面白ノト云結句ハ詠歎ノ意ヲ添ヘタル迄ナリ最斯ノ如キ古人ノ詩句ヲ撫用スルハ幼少ノ時ニ覺エタル事ハ生長後ニ至リテモ忘ル、事ナクシテ詩哥ノ助ケトナル事少カラザレバナリ

樂譜ハ音楽取調掛芝葛鎮ノ作ル所ナリ

思ひ出れば

○思ひ出れば三年のむかし別れし其日我父母のかしら撫つゝまさきくあれといひしおもわのしたわしきかな

○朝になれば門おし開き日數よみつゝ父まぢまさむわがおもひ子は事なしはてゝはやいつしかもかへりきなんと

○夕になれば床うちはらひお指をりつゝ母まぢまさむ吾おもひ子は事なしはてゝはやいつしかもかへりきなむと

○朝になれば門おしひらき夕になればとこ打拂ひ父まぢまさん母まぢまさむはやくかへらむもとの国辺に

此歌ハ稻垣千穎ノ作ニシテ學生ノ遠地ニ在リテ其郷国ヲ出シ時ノ形状ヲ追憶シ又今時ノ情ヲ寫出シ父母ヲ愛戀スルノ情頻ニ興リヤマザル有様ヲ述ヘ孝愛ノ美德ヲ涵養熟成セシメントスルノ旨趣ナリ樂譜ハ古來蘇格蘭土ニ傳リタルモノニシテ何人ノ作ニ出タルカヲ詳ニスル能ハズトイヘドモ懷旧ノ情ヲ暢フルヲ旨トシ英語ニテ歌フ時ハ彼國有名ノ詩人ポルン氏ガ退隱ノ後河邊ノ茅廬ニアリテ旧時ヲ回想シテ作りタル美川^{ガキニ}ノ歌ヲ用キタルモノ也此曲ノ律モ我國ノ双調呂旋ニ異ナル事ナシ

薫りにしらるゝ

○かをりにしらるゝ花さく御園霞にかくるゝ鳥啼林君か代いはひて幾春迄もかをれやかをれうたへやうたへ

○月影てりそふ野中の清水もみち葉にほへる外山のふもと君か世たへせず幾秋迄もてらせやてらせ句へやにほへ

此哥ハ里見義ノ作ニシテ春秋ノ美景ヲ二首ニ作為シ聖代ノ昇平無事ナルヲ祝セルナリ第一首ノ意ハ馥郁タル薫リヲ認メテ花咲ク園生ヲ知り鳥声ヲキ、テ林樹ノアルヲ知ルハ春霞濛朧タル暖風和照ノ時ニ乗ジテ聖壽万歳ヲ祈リ無情ノ花木モ遠近ニ薫リヲ散シ鳥類迄モ嗜

々ト鳴キテ好時節ヲ弄ベト詠ジタルナリ第二首モ同意ニシテ月影ハ野中ノ清水ニ移リ紅葉ハ外山ノ麓ニ句フト云フモ昇平無事ノ景況ニシテ聖寿万歳ヲ祝シ幾千秋月ハ光リヲ磨キ紅葉ハ句ヒヲ著ハスベシト云ヒタルナリ

榮ゆく御代

○さかゆく御世にうまれしもおもへは神の恵なりカヘスへいさや子ら神の恵をゆめなわすれそくくくくくときの間も

○めくみも深くねさしたる御前の神とりもちてカヘスへちみふる神の御前にうたひまはましくくくくくいつまでも

此歌ハ加部嚴夫ノ作ニシテ神祭ノ時ノ哥ナリ故ニ第一哥ハ人ハ神恩ニヨリテ生レ神恩ニヨリテ世ニ立モノナレバ其神恩ヲカリソメニモ忘ル、事勿レト云ヒ第二哥ハ神前ノ榊ノ枝ヲトリテ神樂ヲ奏シ神慮ヲ慰スルノ形状ヲ云ヘルナリ抑此哥第一第二トモ神恩ノ深遠ナル神祭ノ嚴肅ナル状ヲ述べ聴者ヲシテ敬神ノ念慮ヲ発サシムルニアリ樂譜ハ葡萄牙ニ出ツ其意ハ神前ニ集リテ神徳ヲ歌頌スルヲ云フ

富士山

○ふもとに雲ぞかゝりける高嶺に雪ぞつもりたるはたへは雪ころもは雲その雪雲をよそひたるふしてふ山の見渡しにしくものもなしにるもなし

○とつ国人もあふくなりわか国人もほこるなりて日影そらゆく月つきひとつもにかゝりやさてふしてふ山の見渡しにしくものもなしにるもなし

此哥ハ加部嚴夫ノ作ニシテ其第一歌ハ萬葉集中山辺赤人ノ富士山ノ哥「白雲モイユキハバカリ時ジクゾ雪ハ降ケル」トアルニ據リ雪ト雲トヲ對シテ艷美秀峻無比ナル形状ヲイヘルナリ第二哥モ亦同集ヨミ人不知ノ富士山ノ哥ノ句中「天津日ノ影モ隠ヒ照月ノ光モミヘズ」トアルニ據リテ作レルナリ抑此山ハ同歌中ニモ「日本ノヤマトノ國ノ鎮トモイマス神カモ宝トモ成レル山カモ」トモアリテ内外ニ涉リテ普ク贊美スル所ニシテ日月六合ニ照徹スルガ如ク國威ヲ万国ニ耀カスノ表準トモナルベキ名山タルヲ稱揚シ并セテ聴者ヲシテ愛国心ヲ感發セシメン事ヲ希望スルノ意ニ出ル者ナリ

本邦俗樂

新晒

此曲ハ取調掛員山勢松韻ノ作ニシテ箏曲ノ妙處ヲ現ハスベキモノナリ

唱歌略説

一月三十一日

東京女子師範学校附属幼稚園

生徒唱歌

數へ哥

一 人は心か第一よくみかいてをさめて世を渡れく
二 二度かへらぬ光陰をく空しく過してすむものかく

- 三^{三ツ} 三ツ四ツ五ツのをさな子がくく智識を育つる幼稚園く
 四^{四ツ} よき友撰ひて交はれよく善き友善き師は身の守く
 五^{五ツ} いつまでいへども尽せぬはく我身をそだてし親の恩く
 六^{六ツ} 昔をわきまへ今をみてく今より開けん世もおもへく
 七^{七ツ} 何より大事は人の為く人々はけめば國もとむく
 八^{八ツ} 八千世と寿ふく君かよをく助くる人こそ人そかしく
 九^{九ツ} 心を納むる学問のく光りさやけし窓の月く
 十^{十ツ} 處は日の本日の光りく普ねき國恩忘るなよく

此歌ハ福羽美静君ノ戯作ニシテ其旨意ハ世俗流行從來ノ數ヘ哥ハ其言詞最モ鄙俚ニシテ兒童之ヲ口誦スルモ更ニ益ナキを患ヘ其口調ニ倣ヒ一ヨリ十迄次々ニ暗記セハ聊徳性ヲ涵養スルノ資タラン事ヲ意ニ寓セラレシナリ哥ノ意ハ解ヲ俟タズシテ明亮ナリ今此レニ西洋ノ樂器ヲ用ヒ現今幼稚園ニ於テ兒童ノ唱フ処ナリ

進メス、メ 前ニ出ツ

マスヲヲ武士

我門

- 一 こゝなる門は誰か門とほらば通れこゝの門
 二 とほれやとほれ爰の門我らか立てしこゝの門
 三 とほれとならば通らましかへるもゆくも打つれて
 四 樂しき哥をうたひつゝ後れすゝめ友どちよ

此哥第一第二ハ加部嚴夫ノ作ナリ第三第四ハ女子師範學校教員豊田芙蓉ノ作ナリ而シテコハ幼稚園ニ於テ幼兒ノ遊戯中門ノ形ヲナシ此哥ヲ唱フ者ニシテ即遊戯ノ哥ナリ

東京女子師範學校附属小学校及

學習院小學生徒

唱歌掛圖第一曲ヨリ第七ニ曲至ル 前ニ出ツ

學習院生徒唱歌

見渡せば 前ニ出ツ

春の弥生 前ニ出ツ

若紫

○若紫のめも遙なる武藏野の霞のおく分つゝ摘むはつわかな

○若菜はなにぞすゞしろすゝな佛の座はこべら芹なづなに五行七つなり

○七の宝夫より殊に得かたきは雪けのひま尋ねてつむ若菜なり

此歌ハ稻垣千穎ノ作ニシテ早春ノ野色ヲ詠シ第一哥ハ武藏野名産ナル紫草ヲ以テ冠詞トシ春陽ノ快情ヲ通暢シタルモノナリ

樂譜ハ瑞西國ノ大家ニテ學校用唱歌ニ有名ナルネグリー氏ノ作ニシテ山河田園ノ景色ヲ感賞スルノ意ヲ顯ハシタルモノナルヲ少シク取捨シテ我國語ニ適用セシナリ

君かよ

○君かよは千世に八千世にさゝれ石の巖となりて苔のむすまで動きなくときはかきはに限りあらし

○君かよは千尋の底のさゝれ石の鶴のゐる磯とあらはるるまで限りなき御世の栄えをほきたてまつる

第一歌ハ古今集賀ノ部ニ載スル処ノ讀人シラスノ哥ニテ我君ハ千世ニ八千世ニ云々ノ歌ノ我君ヲ君ガ代ト替ヘシモノ也又第二哥ハ源三位頼政ノ作ニテ今撰和哥集ニ載スル処君ガ世ハ千尋ノ底ノサブレ石ノ云々ト云フ哥ヲ用ヒ両首共結尾ノ三句ハ稻垣千頼ノ補足ニシテ聖代ヲ景仰欽慕スルノ意ヲ表セシモノナリ

樂譜ハ英國古代ノ大家ウエブ氏ノ作レルナルモノニテ其本旨ハ恩徳ノ廣大無量ナル感情ヲ顯ハシタルモノナリ

東京女子師範学校附属

小学生徒唱歌

蝶々

○てふく／＼てふく／＼菜のはにとまれなのはにあいたら櫻にとまれ櫻の花の栄ゆる御代にとまれよあそべ遊べよとまれ

○起きよ／＼ねぐらの雀朝日の光のさしこぬさきにねぐらをいて、
梢にとまりあそべよすゝめうたへよすゝめ

第一哥ハ旧愛知師範学校教員野村秋足ノ作ニシテ児戯ニ蝶々々々菜ノ葉ニトマレ云々トイフニ基キ櫻ノ花ノ栄エル御代ニ以下ヲ補足シテ唱歌ノ体ニナシタルモノニテ其意ハ我

皇代ノ繁榮スル有様ヲ櫻花ノ爛熳タルニ擬シ聖恩ニ浴シ大平ヲ樂ム人民ヲ蝶ノ自由ニ舞ヒツ止リツ遊ベル様ニ比シテ童幼心ニモ自ラ國恩ノ深キヲ覺リテ之ニ報セントスルノ志氣ヲ興起セシムルニアル也

第二哥ハ第一歌ニ擬シテ稻垣千頼之作ル処ニシテ雀ヲ以テ学ビニ遊フ児童ニ比シ雀ノ夙ニ起出テ梢ニ歌ヒ遊ブガ如ク児童等ノ朝寝ヲ戒メ早ク出デ、文牀ニ行キ終日学藝ニ遊ベトイフ意ヲ述ベテ戒トシ

タルモノナリ

樂譜ハ其出所ヲ詳ニセザレトモ西班牙国ヨリ傳來シテ諸邦ニ行ハレタルモノナルベシトイヘリ其意ハ幼兒ノ精神ヲ活潑ニシ志氣ヲ快通スルニ在ルナリ

霞か雲か

○霞か雲かはた雪かとはかりにほふ其花ざかり百鳥さへもうたふなり

○霞みは花を隔つれとへだてぬ友ときてみるはかりうれしき事は世にもなし

○霞みてそれと見えねども鶯の音に誘はれつゝも花さくかげに我はきぬ

第一哥ハ櫻花ノ爛熳タル啼鳥ノ宛囀タル状ヲ述ベ陽春ノ佳景ヲ賞讃セルナリ第二哥ハ衆ト共ニ樂シムノ意ヲ寓シテ朋友相親愛スルノ情ヲ感發セシムルニ在リ第三哥ハ第一第二ノ意ヲ受ケテ陽春觀花ノ情ヲ言ヘルニテ共ニ加部嚴夫ノ作ナリ

薫に知らるゝ 前二出ツ

大和撫子

○大和撫子さま／＼に己かむき／＼咲ぬとも生し立てし父母の庭の教に違ふなよ

○野辺の千草のいろ／＼に己かさま／＼咲ぬとも生し立てし天地の露の恵みをわするなよ

此哥前一首ハ稻垣千穎ノ作後一首ハ里見義ノ作ナリ幼児ノ親ノ教育ヲ受ケ生長シテ各自業を異ニストモ父母ノ教誨ニ違フ事ナク其恩徳ヲ報イヨト云ヒタルナリ和歌ニ撫子ヲ以テ幼児ニ譬フル意ハ親ノ撫テ愛シム子ト云フ意ヲ瞿麥ニ寄セタルナリ

第二哥モ同意ニテ野草ノ千差万別種々各々ニ錦ヲ鋪ケルガ如ク花を染メナセドモ元來天地ノ惠ミヲ受ケテ露ノ養ヒヲ得ズハ一花一叢モ生育スル事能ハズ故ニ天地ノ惠ミヲ忘ル可ラズト云フニテ譬喩ノ意ハ君恩ニヨリテ無事ニ清世ニ暮スモ元來ノ惠ミヲ忘ルナト云ヒタルナリ

樂譜ハ取調掛芝葛鎮ノ作ニシテ優美ナルヲ旨トシテ作レルナリ

本邦雅樂

蘇莫者

此曲ハ昔時天平年間林邑國ノ僧佛哲ノ本邦ニ相傳セシ八曲ノ一ニシテ菩薩拔頭等ノ諸曲ト共ニ今ニ現存セルモノナリ

希臘古樂

アポロ讚歌

此曲ハ古昔希臘人が美術ノ神トシテ崇尊シタルアポロノ美德ヲ頌シテ作りタルモノニシテ實ニ一千有餘年前ノ古樂ナリ抑此曲ノ始メテ世ニ知ラレタルハ一千五百八十一年ニ於テ有名ナル天文学士ガリレヲノ父ヴァインセンゾガリレオガ伊太里國羅馬府ナルカヂサル、セント、アンゼローノ書庫ニ希臘樂曲ノ寫本アルヲ發見シ之ヲ其著書中ニ載セタルニ因レリ其後千七百世紀ノ頃英國ニマークメイボムナ

ルモノアリ同國オックスホルド學士社會ニ希臘有名ノ音樂家ノ作ヲ蒐集シテ一書ヲ著サン事ヲ謀リ大ニ諸家ノ助成ヲ得タリシガ遂ニ果サズ博士ジョンワリス其遺業ヲ継キ一千六百九十三年頃ニ至リ始メテ其書ヲ完成セシカ其中ニ亦アポロノ讚哥ヲ載セタリ又一千七百二十年ノ頃佛國ニブレットナルモノアリ巴里府佛王書庫中ニ希臘古樂曲ノ寫本アルヲ發見シ之ヲ或ル學社ノ報告書ニ載セタリ斯ノ如ク此曲ハ前後三回出處ヲ異ニスト雖トモ羅馬府ニ出タルモノトオックスホルドニ出タルモノトハ全ク相符合シ巴里府ニ出タルモノハ唯少ク異ナル所アリシニ過キズト云是レ歐洲ニ於テ此曲ヲ傳來シ本邦ニ於テハ取調掛長伊澤修二此曲ヲチヤペル氏音樂史中ニ得テ其旋律ノ方法等ヲ研究セシニ元來希臘古樂ノ調律及旋律等ノ理論ハ更ニ本邦ノ音樂ニ異ナル事ナク此曲ハ實ニ我盤涉調ニ當ルモノナルヲ發見セリ依テ取調掛芝葛鎮ニ謀リテ之ヲ調和シ三管ニ絃ヲ用キテ之ヲ奏セシメシニ其律呂ノ旋回等相同キ殆ド彼我ノ別ヲ識ル能ハザルモノアリ是レ我音樂ハ管理論ニ於テ歐洲ノ古樂ト其趣ヲ同クスルノミナラズ實際奏曲ノ方法ニ至リテモ亦異ナル所ナキヲ證スルニ足ルモノナリ

本邦俗樂

數へ歌

西洋音樂家ノ理論ニ隨テ三味線ノ棹ニ寸法ヲ畫シ之ヲ取調掛山勢松韻等ニ附シテ通常ノ數へ歌等ヲ彈セシメ彼我ノ音律殆ンド相同キヲ證スルモノナリ

しらぶる琴

○しらぶる琴もふく笛もふしきたまれる人の道親子兄弟むつましく
尽せぬ榮へそたのもしき

此歌ハカゾヘ哥ノ後ヘニ付シテ作ラレシ福羽美静君ノ哥ナリ父子
親愛シ兄弟友愛スルハ人倫ノ大道ニシテ天地ノ自然ニ出デ萬古不易
ノ定則ナレバ人々果シテ此道ニ背ク事ナク父子兄弟相親睦シテ世ニ
タツモノナルヲ即尽セヌ榮エトイフナリ琴笛ノ類モ自ラ其定律嚴然
紊ルヘカラサルモノニシテ誤テ之ヲ紊ルトキハ琴モ琴ニアラズ笛モ
笛トイフベカラズ故ニ其道ノ紊ルベカラザルヲ琴笛ノ定律アルニ比
喩シテ少年ヲ箴メタルナリ

此曲ハ山勢松韻ノ作ニシテ静雅ヲ旨トシテ作レルモノナリ是レ全
ク我俗樂ノ旋法ニ從フモノニシテ亦希臘古樂ニ酷似スルヲ示スベキ
モノナリ

村雲

○村雲も人の心も月ゆゑにすみゆくよはくさむらのまつむしさへ
もねに立て露のうらばになくものを学ひのともよとへかしな

此哥ハ里見義ノ作ナリ之ヲ作りタル趣意ハ凡本邦三絃箏琴等ニ懸
ル哥枚擧ニ暇アラスト云ヘドモ大凡猥褻ニシテ稠人廣座ニテ專ラ唱
フベカラザルモノ多シ然ルニ律旋ニ至リテハ遥ニ後人ノ及バザル妙
所アレトモ徒唱哥ノ体裁ニ飽カヌ処アリテ此儘用ユベカラズ此ヲ以
テ音樂所ニ於テハ傍ラ俗歌改良ニ着手セントシテ撰ヒタル也尤基ク
処ハ宵ヤ待チト云フ歌ニテ之カ句調ニヨリ之ガ律旋ヲ其儘用ヒテ秋
夜友ヲ待ツノ意ヲ詠ジタル也大意ハ月色皎々トシテ人ノ心モ朗カニ
ナリ村雲モ消失セテ草間ニ人ヲ待ツカ如キ声ニテ松虫ノ吟スルヲ聞

ケバ吾ノミカ小虫ダニモ友ヲ待ツノ意アリ哀レ同志同學ノ友人ヨ早
ク来リテ吾ト此清夜ヲ共ニ賞スベシト云ヒタルナリ

此曲ハ世ニ「原資料脱落」ノ作ナリト言傳フルモノナリ然シテ其律
呂ノ旋法ハ俗樂中ノ一法ニシテ亦希臘樂ニ同シキ所アリ

六段

此曲ハ尋常ノ箏曲ニシテ世人ノ熟知セルモノナリ今之ヲ洋琴ニテ彈
スレハ彼我ノ音律異同ナキニ依リ彼樂器ヲ以テ直ニ我音樂ヲ奏シ得
ベキヲ示スモノナリ

西洋樂長音階

我日ノ本

此曲ハ作者ヲ詳ニセザレトモ元來天竺國ヨリ出テ歐洲諸國ニ傳ハ
リ現今ニ在リテハ殆全地球ノ各國皆之ヲ歌フニ至レリト云是レ音樂
ハ世界各國ニ涉リテモ交互ノ間殆大差ナキヲ示シ得ベキモノニシテ
我國ノ律ニ比スレバ尅越調ノ呂旋ニ當ルモノナリ

本邦雅樂律旋

越天樂 平調

此曲ハ唐樂ノ一種ニシテ文宗皇帝ノ作ナリト云ヒ傳フ從來世上ニ
行ハル、今様哥ナルモノハ此曲ヲ假リテ詞章ヲ填スルヲ常トセリ是
レソノ音節ノ優雅ニシテ自カラ本邦ノ言語ニ適應スル所有ルヲ以テ
ナリ

本邦雅樂呂旋

酒胡子

此曲亦タ唐樂ノ一種ニシテ醺飲ノトキ之ヲ奏スルニ宜シトス樂書ニ云フ諸葛相如ガ酒胡子ノ賦ニ日本ヲ用キテ形ヲ成シ人質ニ象トル掌握ニ在リテ甌ブベシ杯盤ニ遇ヘバ則チ出ツト蓋シ酒胡子ハ酒筵上酒杯ヲ勸ムルノ戲器ニシテ清俗ニ所謂酒〔寧〕類ナルベシ

本邦雅俗及西洋管絃樂器

混同大合奏

螢ノ光

此曲ハ蘇格蘭土ノ古傳ニ出テ其作者ヲ詳ニセズト雖トモ其意ハ告別ノ際自他ノ健康ヲ祝スルニ在リトス今東西ニ洋雅俗諸樂器ヲ悉ク混用シテ之ヲ奏スルモノハ音樂ニ彼我東西ナキ以上ハ異風ノ樂器ヲ合同シテ一曲ノ音樂ヲ奏シ得ベキ理ナリ果シテ之ヲ奏シ得ハ實地ニ其然ル所以ヲ證スベク又他ノ贅辨ヲ要セザルヲ示スモノナリ

右ハ明治十五年一月三十日及三十一日ノ兩日ヲ以テ音樂取調成績報告ノ節取用セシ所ノ音樂及唱歌ノ條理ヲ解説セルモノナリ

文部省音樂取調掛

次の文章はこの演奏会について、伊澤修二が、明治十五年度音樂取調掛報告書中に記したものである。

音樂取調ノ成績報告ノ為大演習舉行ノ事

本掛創置以來其日タルヤ尚淺シト雖トモ本掛ニ於テ從來研究スル

トコロヲ以テスレハ既ニ本邦雅俗樂ノ音律ト西國ノ音律ト道理ニ於テ相異ナラサル所以ヲ詳カニシ且本掛傳習生直轄兩師範學校及學院生徒等ニ試施スルトコロノ唱歌洋琴及管絃樂等モ成果ヲ結ビ其進歩ノ見ルベキヲ致セリ因テ實際演奏ヲ以テ之ヲ報告スル事本務上ノ要件ト為レリ是ヲ以テ為ニ裁可ヲ經本年一月三十日及三十一日ノ兩日ヲ以テ音樂取調ノ成績報告ノ為メ大演習ヲ昌平館ニ開キ本省卿輔以下諸官及ヒ内外貴紳ノ臨場ヲ牒請シ本掛傳習生兩師範學校及學院等ノ總生徒ヲ會集シ諸樂演奏ヲ舉行セリ即チ一月三十日ニ於テハ音樂教師メーソン氏唱歌并音樂進歩ノ情況ヲ報告ス其要旨ハ蓋シ今日此處ニ報告スルヲ得タル音樂取調ノ事業ハ數年前伊澤修二目賀田種太郎ノ二君等米國ニ在學ノ際既ニ其萌芽ヲ發シタルモノニテ當時此二君本務ノ余暇ヲ以テ余カ宅ニ會シ音樂ノ事ヲ研究セラレ終ニ西樂ト日本樂ト其道理ニ於テ異ナル處ナキ所以ヲ明カニシ其由ヲ文部省ニ開陳セラレタリ然シテ二君帰朝ノ後適文部省音樂取調掛ヲ置カレ伊澤修二君ヲ以テ其事ヲ掌握シマタ遠ク余ヲ迎ヘシメラル元來唱歌ヲ以テ東京師範學校東京女子師範學校及學習院等ノ生徒ニ授クルニ其進歩ノ著シキモノアリ今日該諸學校ノ生徒ヲシテ演奏セシムルトコロニ由テ諸君之ヲ實際ニ徵セラレヨ云々ノ事ヲ述ベリ

右終テ東京師範學校附属小學生徒唱歌掛圖第二曲及單音唱歌七種ヲ演ス右退出シテ音樂取調掛傳習人洋琴六曲ヲ奏ス後東京女子師範學校生徒音樂取調掛助教及傳習人合併ニテ單音唱歌三種複音唱歌一種三重音唱歌一種高等單音唱歌二種ヲ演ス後休憩後本邦俗樂ヲ奏ス同三十一日ニ於テハ音樂取調掛長伊澤修二音樂取調ノ現況ヲ報告ス其要旨ニ從來音樂取調掛ニ於テ我邦ノ音樂ト他ノ文明國ノ音樂ト

ニ別アリヤ如何ヲ研究セシニ抑此別ノ有無ヲ辨センニハ彼眼ヲ以テ物ノ長ヲ量ルニ尺度ヲ用フル如ク耳ヲ以テ物ノ顫動ヲ測ル其即チ音律ニ據ラザルベカラズ然シテ此音律ニ據テ之ヲ測レハ彼我ノ音律ハ理論上ニ於テハ小差アリトイヘトモ實際ニ於テハ全ク相同シキモノト為スハ東西音楽家ノ證認スルトコロナリ

然リ而シテ彼我ノ音律相同シトスルトキハ其旋律ノ法如何ヲ究メザルベカラズ是レマタ彼我ノ旋律ヲ同一ノ標準ニ帰セザレハ能ハズ即チ各國普通ノ樂譜ニ據ルニ如クモノナシ然ルニ我邦ニ於テハ笙ハ笙ノ符アリ笛ハ笛ノ符アリ俗曲等ニ於テハ樂譜ナクシテ一ニ記憶ニ屬スルモノ多シ故ニ本掛ハ從來本邦風ノ樂譜アルモノハ之ヲ普通ノ樂譜ニ移シ其無キモノハ新タニ之ヲ附スルニ據リテ我國旋律ノ法ヲ研究スルヲ得タリ音樂歴史ニ於テハ一ノ大進歩ヲ標記スルモノト云ザルヘカラズ

斯ノ如ク本邦ノ音樂ヲ解剖シテ其美惡ヲ比較判定スルヲ得ルニ至テハ樂曲ノ善美ナルモ歌作ノ宜キヲ得サルモノハ其歌ヲ改作シマタ樂曲ノ旋律宜シキヲ得ルモ和声ニ乏シキモノハ之ヲ調和シテ其和声ヲ作ルベシ既ニ本掛ニ於テ調和セシモノ數曲アリ大和撫子、仁義禮智、鏡ナス、等はナリ

然リ而シテ彼我ノ音樂要スルニ相同シトセハ何ゾ彼カ長ヲ取リテ我短ヲ補フニ憚ランヤ此レ本掛樂曲ノ採ルベキモノハ彼樂曲中ヨリ之ヲ採ル所以ナリマタ本邦ノ古歌中ニ於テモ取ルベキモノハ採テ之カ曲ヲ作レリ昨日女子師範生徒ノ唱フタル「鏡ナス水ノ緑ノ影ウツル」ノ歌ハ有名ナル朗詠ニ新タニ樂曲ヲ作リタルモノニテ又大和撫子ハ歌モ樂曲モ共ニ新タニ作りタルモノナリ

此他唱歌集出版ノ事樂器試製ノ事國歌撰定ノ命ヲ蒙リシ事情等ヲ縷述シ後來音樂ノ力ニ倚リテ我國人民ヲシテ益々聖代ヲ欽慕シ奉リ尊王愛國ノ誠心ヲ感發セシムルニ至テハ豈タ、二本掛ノ榮ノミナランヤ實ニ我國家ノ為ニ賀シ奉ルベシ云云ヲ述ベリ

抑該兩日ハ天氣清朗ニシテ寒將ニ去テ春將ニ來ラントスルノ好晷ニ際シ本省卿輔已下諸官ハ云ニ及バス皇族大臣外國公使其他朝野ノ紳士學校生徒親族朋友ノ臨場實ニ意外ニ出テ滿館立錫ノ地ナキニ至リ既ニ入館ヲ斷ルモノマタ其數ヲ知ラス蓋シ和漢洋雅俗諸樂曲ヲ一場ニ演奏セルハ本會ヲ以テ嚆矢トス本會ノ執行ハ音樂ニ係ル思想ヲ社會ニ興發シ尋テ音樂會ノ興行等陸續世ニ行ハル、ニ至リシハ本會與リテ力アリトス

〔手書き〕

〔諸向往復書類〕明治十五年一月十二月下

記録によるとこの演習会に取調掛が招待を予定した人々は次のようである。

北白川宮殿下、同妃殿下、東伏見宮殿下、同妃殿下、有栖川宮殿下、同妃殿下と高官たちすなわち太政大臣三條實美同夫人、右大臣岩倉具視同夫人、外務卿井上馨同夫人令嬢、外務大輔上野景馨同夫人北堂、大蔵卿松方正義同夫人、参事院副議長田中不二麿同夫人、文部卿福岡孝弟同夫人、文部少輔九鬼隆一、文部大書記官濱尾新、同西村茂樹、同辻新次、東京大学総理加藤弘之、同総理心得池田謙齋、同予備門主幹服部一三、学習院長立花種恭、東京師範学校校長高嶺秀夫、同女子師範学校校長那珂通世、同女子師範学校校理福羽美静、外国語学校校長内村良藏、東京府知事松田道之同夫人、判事目賀田種太郎、東京博物館手島精一、大坂中学校校長折田彦市、ドイツ国公使、農商務大書記官町田久成、文部少書記官伴正順、同久保田讓、小林小太郎、同権少書記官江木千之、同岩崎維謙、吉村寅太郎、同安東清人、文部省御用掛西周、箕作秋坪、式部六等

出仕國司仙吉、日報社長福地源一郎、益田孝妹、永井繁等。

〔音楽取調掛日誌その他〕

(三) 明治十五年七月一日メーソン送別演奏会(詳細はメーソンの項、

二三四頁を参照)

(四) 「明治十六年一月二十二日エッケルト氏来所ニ付演奏手續

書」(詳細はエッケルトの項、二四七頁を参照)

(五) 「明治十六年七月十一日期末演習會」

取調員并新募生

唱歌 受持 辻則承

大和撫子

若紫

掛長演説

俗曲

長唄 受持 内田彌一

高砂

箏曲 受持 山勢松韻

関の清水

紅葉の賀

清曲 月琴合奏

箏曲 六段

管絃樂 受持 エッケルト

霄星歌 (演劇タンハイセルノ曲
ワグネル氏作)

大洋歌 (シューベルト氏作)

洋琴 受持 瓜生繁女

欲農歌

一ツトセー

三人合弾曲

唱歌 受持 上眞行

鏡なす (箏胡弓合奏)

太平曲 (同)

花や紅葉

仰げば

休憩

掛長演説

唱歌 受持 上眞行

寧樂の都

母の思ひ

おぼろ

洋琴 受持 瓜生繁女

證状授與

取調員十一名へ

唱歌 受持 鳥居忱

螢の光

以上

〔手書き〕

〔音楽取調掛奏樂録〕明治十六年

(六) 「明治十七年一月二十三日大木文部卿巡視につき本掛事業

供閲」

立案者、神津、永井、上、辻、加藤、林、藤川、飯沼

唱歌Ⅱ傳習生徒男子

唱歌初歩Ⅱ富士山、霞カ雲カ、鏡なす、五倫、ヤヨ船子(輪唱)、

大平曲

洋琴Ⅱ傳習生徒男子、三曲

唱歌Ⅱ箏、胡弓合奏、見習生女子

鳥ノ聲、霞カ雲カ、五月ノ風

高等唱歌Ⅱ見習生女子

白蓮、菊

箏曲、改良歌Ⅱ見習生女子

螢、三の船

洋琴Ⅱ見習生女子

マーチ、二人彈曲、三人彈曲

洋風管絃樂Ⅱ助教員

マタ氏ノ演劇音行樂

俗樂、三曲合奏、改良歌Ⅱ取調掛員及出勤人

(東)
吾妻獅子

長唄、改良歌Ⅱ助手及出勤人

寄見祝

明治頌薩摩琵琶Ⅱ取調掛員

神器、國旗

〔音監回議書類〕明治十七年上

〔手書き〕

(七) 明治十七年五月十日月次演奏会

洋琴

四人合彈曲

唱歌 箏胡弓合奏

霞か雲か

岩もる水

同 高等單音及諸重音

寧樂の都

誠は人の道

才女

めぐれる車

霞にきゆる

管絃樂

ポルカ

改良俗曲

長歌

夢見草(元歌 初時雨)

箏歌 三曲合奏

石橋 (元歌 東獅子)

洋風管絃樂 三曲

汝可憐ノ夕星(演劇「タンハイセルノ曲」)ワグネル氏作

落花 (踏舞曲) ヘルマン氏作

演劇「マルター」ノ曲改作 フロトウ氏作

唱歌 箏バイオリン合奏 四曲

大和撫子

鏡なす

五月の風

遊獵

本邦俗曲 三曲合奏 二曲

晴天鶴

石橋(元歌 東獅子)

以上

〔手書き〕

〔音監回議書類〕明治十七年下

月次演奏会は、音楽取調掛の進歩の状況を広く世間に披露する目的で計画された定期演奏会風のものであり、毎月第二土曜日に行うことを決めた。これは第一回のプログラムである。

(八) 「明治十七年五月十二日京都府吏員等参観二付演習曲目」

唱歌 三曲 傳習生

初歩

1 忠臣 2 誠ハ人ノ道

3 イツシカユキハ

洋琴 三曲 同

一人弾

一人弾

二人弾

唱歌 箏胡弓合奏 三曲 見習生

霞カ雲カ

母ノ思ヒ

雨露(風琴)

洋琴 二曲 同

二人連弾

三人連弾

箏曲 改良歌一曲 同

三の船

管絃樂 一曲 助教員

ポルカ

〔手書き〕

〔音監回議書類〕明治十七年下

(九) 明治十七年六月十四日月次演奏会

洋琴

連弾曲 クラリオネット合奏 二曲

三人合弾曲 一曲

唱歌 高等單音

雲

花月

白蓮白菊

ウツクシキ 箏胡弓合奏

遊獵 同

イツシカ雪モ 複音

管絃樂

演劇「マルター」ノ曲改作 フロトウ氏作
野生薔薇(踏舞曲) ヘルマン氏作

改良俗曲

長唄

晴天鶴

箏曲 三曲合奏

竹生島(原歌 住吉)

以上

〔音監回議書類〕明治十七年下

〔手書き〕

(十)「明治十七年十月九日東京府外十二縣聯合學事協會會員參觀

二付演奏手續」

午後第一時ヨリ二時マデ 唱歌

2 見習生

3 傳習生徒

1 府縣派出生

見習生

傳習生徒

見習生

傳習生徒

見習生

傳習生徒

見習生

傳習生徒

見習生

傳習生徒

見習生

傳習生徒

千草の花

春の夜(箏胡弓合奏)

秋草 (〃)

學び (輪唱)

誠は人の道(複音)

五倫の歌 (風琴)

富士山 (〃)

洋琴

〔ポルカ〕

三人連彈

數へ歌

二人連彈

歐洲管絃樂

〔ポルカ〕

改良俗曲

長唄

花見車(旧名 花見車)

箏曲

石橋(旧名 吾孀獅子)

以上

傳習生徒

傳習生徒

傳習生徒

傳習生徒

見習生傳習生合奏

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

見習生

林、加藤、杉本

〔手書き〕

〔音監回議書類〕明治十七年下

(十一) 「明治十七年十月十一日司法省雇佛国人アツペール氏参

観二付演奏曲目」

唱歌

見渡せば (單音)

派出生徒

橘 (〃)

見習生

春の夜 (箏胡弓)

傳習生徒

五倫の歌 (風琴)

〃

誠は人の道(複音)

〃

洋琴

數へ歌

傳習生

バブリング、ポルカ

見習生

ジョイフル、ペザント

〃

シューベルトス、ソナタ

〃

歐洲管絃樂

幸田

ポルカ

教員

改良俗曲

長唄

助手及出張人

老松

晴天鶴

箏曲

取調員及出張員

松竹梅

楓の賀

以上

〔手書き〕

〔音監回議書類』明治十七年下〕

(十二) 「明治十七年十月十六日嶋津珍彦外九名參觀二付演奏手

續」

唱歌

見渡せば (單音)

派出生徒

螢 (同)

傳習生徒

春の夜 (箏胡弓合奏)

傳習生徒

秋草 (同)

誠は人の道(複音)

傳習生徒及見習生徒

青穂 (同)

橘 見習生徒

五倫 (風琴)

富士山 (同)

洋琴

數へ歌 傳習生徒

三人連彈 同

ジョイフル、ペザント 見習生徒

歐洲管絃樂

ポルカ 教員

改良俗曲

箏曲 取調員及出張員

石橋(旧東獅子)

以上

〔手書き〕

〔音監回議書類』明治十七年下〕

〔十三〕「明治十八年一月十七日月次音楽演習會演奏曲目」

洋琴

ウエディング、マーチ（メンデルソン氏作）（遠山見習生）

唱歌

皇御国 風琴合奏（派出生）

春の夜 箏胡弓合奏（見習生）

千里の道（複音）（同）

祝へ吾君を 管絃樂合奏

改良俗曲

箏曲

六段（見習生）

雪の朝（原歌 雪の朝）（同）

甘泉殿 三曲合奏（原歌 八重垣）

洋琴

ゼネラル、スミッス、マーチ（連弾曲）（見習生）

休憩

洋琴

ブリューメン、リーデ（ガスタール、ランゲ氏作）（見習生）

ノクチュールン（トール氏作）（見習生）

洋風管絃樂

路易第十三世ノ作曲

夕星（演劇「タンハイセル」ノ改作）（ワグネル氏作）

改良俗曲

長唄

唱歌

翁（原歌 雛鶴三番叟）

君が代 洋琴合奏

〔手書き〕
『音監回議書類』明治十八年

この演奏会は月次演奏会として第三回目である。毎月行う計画であったが、実際には一年間に三回開いたのみで終ってしまった。三回とも会場は満員の盛況で「聴衆はみな大変に満足して帰宅した」と伊澤は報告している。

〔十四〕明治十八年六月八日ヴァイオリン奏者モーレルを招待して音楽演習会開催

て音楽演習会開催

音楽取調所は六月八日午後八時音楽演習會に際し上野公園内東四軒寺町文部省新築館に於て佛國の音楽師ウキオロン獨奏家モーレルを招聘して音楽を催し山勢松韻山登萬和山田貴松調山登松齡荒木古童の三曲合奏あり其演奏曲目は

第一部

一 ファンテージー 曲名 ○カプリス 曲名 作者 ヴキウタン

白耳義風クラシツク音楽

二 ロマンズ、アン、ファ 曲名 作者 ハン、ビートーブエン

獨逸風クラシツク音楽

三 新晒 日本俗樂三曲合奏

四 フラースト 曲名 作者 グウノ

オペラ

ファンテージー

調和者デ、アラール

佛蘭西風近代樂

第二部

五 グラン、コンセルトー 作者シヤール、ド、ベリヤー

佛蘭西風クラシツク音樂

六 スーヴニール、デードン 曲名 作者エードン

澳大利ノ頌歌 調和者レヲナール

七 巢籠 日本俗樂三曲合奏

八 イル、トロヴァアトール 曲名 作者ヴェルヂー

オペラ

ファンテージー 調和者デ、アラール

伊太利風近代樂

左に西洋音樂家所用の數語の解釋を録す

クラシツク」ハ古代風ノ樂ニテ其趣味深沈優雅ニ涉リ高等ナル音樂

ナリ

モデルン」ハ近代風ノ樂ニテ其趣味快活ニシテ通俗人衆一般ノ耳ニ

入り易キ人情ニ近キ音樂ナリ

ファンテージー」ハ幻樂ト譯ス即幻想ノミヲ空構シタルモノニテ其

作法一モ音樂ノ規則ニ據ラズシテ作者ノ幻想ヲ自由自在ニ表出シ

タルモノナリ

カプリス」ハ樂曲製作ノ通規ニ拘泥セスシテ想像ニ耽ケ飽クマテ我

欲スルトコロノ幻想ヲ長ゼシメタルモノニテ之ヲ「ファンテージ

ー」ト比較スレバ「ファンテージー」ハ現在スルトコロノ幻想ニ

シテ樂曲ノ影響即チ此「ファンテージー」ノ爲ニ感動スルトコロ

ノ情ハ演曲ノ時ノミニ係リ「カプリス」ハヤ、猛烈ナル氣色ヲ帶

ヒ「ファンテージー」ヨリ更ニ荒々シキトコロアリテ其影響引テ
永感スルモノナリ更ニ之ヲ約言スレバ「ファンテージー」ハ即席
ノ作ノ體ノモノニテ「カプリス」ハ熟考深按シテ作りタルガ如キ
モノナリ

「オペラ」ハ戲曲ト譯ス此樂曲ハ節ヲ附ケテ唱フ部分ト誦讀體ニ演述
スル部分ト衆多合唱スル部分等ヲ含有シ豫テ廣大ナル模様ヲ交ヘ
勢強キ箇所ヲ加ヘ其他種々ノ潤色ヲナシ而シテ活發ナル動作ヲ表
出スルモノナリ蓋シ「オペラ」ハ西紀千六百年フロレンスノ人ヲ
ツタビオ、リナクシニ發明創作スルトコロナリトイフ

「シンフォニー」ハ雅樂ニ所謂序破急ノ如キ序部、結部ヲ全備シタル
器奏的ノ樂ニシテ大合奏ニ用フベキモノナリ
「ロマンス」ハ優美ナリトイヘトモ甚タ不規則ナル製作ノモノナリ
「コンセルト」ハ特ニ某樂器ノ妙所ヲ呈出センガ爲ニ作レル樂曲ニ
シテ他ノ諸樂器合奏ノ部分ヲモ具備セルモノナリ

「クランド、コンセルト」ハコレセルトノ更ニ大仕掛ケナルモノ
ヲイヘリ

(『大日本教育會雜誌』二十号、明治十八年六月)

(十五) 「明治十八年七月二十日午後二時ヨリ上野公園地内文部
省新築館ニ於テ音樂取調所卒業演習會」

(全科卒業演奏會、卒業生幸田延、遠山甲子、市川チミ)

第一部

洋琴独奏曲 遠山甲子女

ポロネーズ ショパン氏作

唱歌

本所生徒

指揮 上眞行

揚げば尊とし 箏 野中武雄、高田銆女

胡弓 傍島萬年女

鏡なす 箏 金津鹿之助、亀井虎三郎

胡弓 門奈矩理女

大平曲 箏 遠山甲子女、森富女、傍島萬年女

胡弓 市川道女

壇生の宿 四部合唱

洋琴連弾曲 小山作之助、白井規矩郎

レ、セーゾン ルルー氏作〔作曲者は陸軍軍楽隊備外国人教師〕

伊澤音楽取調所長報告

卒業證書授與

森文部省御用掛閣下演述

洋琴独奏曲 市川道女

ポラツカ、ブリアンテ ウェバル氏作

連奏曲 ヴァイオリン 幸田延女

洋琴 遠山甲子女

ラスト、ローズ、オブ、サンマー フンテン氏作

本邦俗樂

其一 七草 箏 幸田延女、遠山甲子女、森富女

胡弓 市川道女

尺八 加藤精一郎

三味線 山勢松韻

其二 乱れ 箏 (其一に同じ)

三味線 山勢松韻

第二部

洋琴独奏曲 幸田延女

アウフォルデルング、ツム、タンツ

歐洲管絃樂

ヴァイオリン 多久隨

ヴァイオラ 辻則承

ヴァイOLONセロ 上眞行

フルート 奥好義

リーダー エッケルト氏

テレセン、ワルツ フォースト氏作

絃樂クワルテット ヘーテン氏作

伯爵大木文部卿閣下演述

唱歌

其一 本所生徒

不二山 樂曲 ヘーデン氏作

歌詞 加部嚴夫氏作

ヴァイオリン、ヴァイオラ、ヴァイOLONセロ、フルート共奏

其二

君ハ神 樂曲 ビートーベン氏作

歐洲管絃樂器共奏

所長伊澤修二君報告

今日ハ本所生徒卒業演習會ニ際シ伏見宮二品親王殿下ヲ始メ奉リ大臣參議文部卿閣下并ニ各國公使其他貴顯紳士貴婦人ノ來臨ヲ辱クシ茲ニ其盛典ヲ執行スルヲ得タルハ職ヲ本所ニ奉スルモノ、無限ノ幸榮ト存スル所ナレハ聊其事業ノ概梗ヲ申報シ以テ此ノ千歲不遇ノ好機ヲ空シクセサラント存スルナリ

抑本所ノ濫觴ハ明治十二年十月文部省中ニ音樂取調御用掛ヲ置カレタルノ時ニ在リ當時音樂ノ事猶未タ明カナラスシテ本邦ノ音樂ト西洋ノ音樂トノ關係如何ノ論ノ如キニ至リテハ漠トシテ歸着スル所ヲ知ラス隨テ事業ノ方向モ確然定立スル能ハサリキ然ルニ爾來該掛僚屬諸員ノ協心戮力其調査考定ニ從事セシニヨリ遂ニ能ク今日ノ成績アルヲ效タスニ至レリ

今日卒業ノ生徒ニハ數年間本所ニ在學シテ本所々定ノ學科課程ヲ全ク卒ヘタルモノト一時諸府縣ヨリ派出シテ唯其若干部ノ傳習ヲ卒ヘタルモノトノ二種アリテ各其教養ノ方法ヲ異ニシタルモノナリ
本所々定ノ全科ヲ卒業セシモノハ三名アリテ此生徒ノ内二名ハ明治十三年十月中本所ニ入り四ヶ年有餘ノ勉學ニヨリ今日始メテ其卒業ノ榮ヲ得タルモノナリ始メ此等ノ生徒ト同時ニ入學ヲ許可シタルモノ男九名女十三名合計廿二名ナリシカ内十二名ハ半途ニテ退學シ七名ハ卒業ニ至ラスト雖當時音樂教員ノ缺乏ニ際シ事情不得止ニヨリ半途ニシテ就職ヲ命シ其他一名ハ死亡シ去リ唯僅ニ此二名ヲ殘シテ今日ノ榮ヲ擔ハシメタルノミ是レ音樂ノ事タル其學藝ノ高妙ニシテ學ヒ易カラサルニヨリ能ク之ニ耐フルモノ少キト其事業ノ艸創ニ屬スルヲ以テ各般ノ困難ノ進路ヲ妨ケタルモノアリシトヲ證示スルニ足ランカ他ノ一名ノ生徒ハ明治十四年夏ヨリ本所ニ通學シ十五年

四月ニ至リ始メテ入學ヲ許可シタリシト雖トモ其學藝ノ進歩非常拔群ナリシニヨリ今日此榮典ニ與ルヲ得タルモノナリ

今此生徒等カ學得タル所ノ學科目中特ニ各長技トスル所ノモノヲ學クレハ一名ハ洋琴「ヴィオリン」、箏、唱歌ニ長シ一名ハ洋琴、箏及唱歌他ノ一名ハ洋琴、胡弓及唱歌ニ長シタルモノナリ其ノ技藝ノ巧拙ノ如キハ諸賢ノ總聽ヲ仰クヘキニヨリ茲ニ小官カ贅辨ヲ費サ、ルナリ

諸府縣派出傳習生ハ唱歌、風琴、箏、胡弓等ノ内普通學校ニ要スル所ノ若干部ノ傳習ヲ卒リタルモノニシテ總計二十名アリ内十四名ハ客年九月ノ入學ニ係リ其他六名ハ入學ニ數ヶ月間ノ先後アリト雖トモ要スルニ僅ニ一ヶ年内外ノ日月ヲ傳習ニ費シタルモノニシテ其内六名ハ四科ノ傳習ヲ卒ヘ八名ハ三科五名ハ二科一名ハ一科ノ傳習ヲ卒ヘタルモノナリ此等ノ生徒ハ其傳習期日ニ限リアルヲ以テ素ヨリ學藝ノ完成ヲ望ム可カラスト雖トモ其生徒ノ才力ニ從ヒ各得タル所ヲ以テ之ヲ實地ニ施サハ今日唱歌教員缺乏ノ秋ニ際シ其一分ヲ補スルヲ得ヘシト信スルナリ

右二種ノ生徒ノ教養ハ本所教員全體ノ協力勤勉ニヨルト雖トモ特ニ主トシテ各科ノ教授ニ任シタルモノ唱歌ニハ上眞行、鳥居忱、洋琴ニハ瓜生繁女、風琴ニハ奧好義、辻則承、箏ニハ山勢松韻、加藤貞女、胡弓ニハ林蝶女等ナリ然シテ高等ナル專門歐洲絃樂樂器即チ「ヴィオリン」等ハ特ニ教師エツケルト氏ノ擔當セシ所ナリ

此ニ本所設立以來大ニ與リテ功アリタル一人ノ教育家ヲ記セサル可カラス即チ米國ボストン府ノ音樂師エル、ダブリュー、メーソン氏ナリ氏ハ明治十三年三月二日我省ノ聘ニ應シ來テ本所ニ職ヲ奉シ

爾來二ケ年有餘一日ノ如ク孜々諄々能ク生徒ヲ教誘シ今日卒業セル
數名ノ生徒モ當初ハ皆ナ氏カ教養薰陶ヲ被リタルモノナリ

以上ハ本所事業ノ一部分タル生徒教養ノ事項ヲ略報シタルモノナ
リ是ヨリ音樂取調ノ事項ヲ申報セントス然ルニ本所設立以來客年二
月ニ至ルノ成績ハ既ニ文部卿閣下ニ申報シ其後廣ク之ヲ諸方ニ頒チ
タレハ喋々茲ニ贅辯スルヲ須キス其後ニ興リタル事蹟ニシテ較々記
スヘキモノヲ舉クレハ英米二國ノ萬國博覽會ニ際シ始メテ日本ノ音
樂ノ何者タルヲ廣ク歐米ノ學士社會ニ知ラシムルノ機ヲ得タル事ナ
リ抑本邦ノ音樂特ニ俗樂ノ如キハ古來一定ノ記譜法ナキニヨリ口傳
耳受ノ外之ヲ外人ニ知ラシムルノ途斷エテアル事ナク恰モ野蠻無文
字ノ國ニ於テ其人民ノ思想ヲ他人ニ傳フルニハ口耳ノ外他ニヨルヘ
キ手段ナキト一般ナリキ故ニ本所ニ於テハ其創立ノ始ヨリ彼我音樂
異同ノ點ヲ研究シ彼我同一ノ基本ニ歸スヘキヲ發明シ彼俗曲歌謠ノ
如キ如何ニ旋律拍節ノ錯綜ナルモノト雖モ之ヲ萬國普通ノ記譜法ニ
録スルノ法ヲ得既ニ箏曲集、長歌集ノ如キハ此方法ニヨリテ樂譜ヲ
編製シ不日發刊ノ運ニ至ラントス此法ニヨルトキハ其教授ト樂習ト
ノ利便ヲ得テ舊法ニ比スレハ其進歩ノ速ナル事三倍若クハ四倍スル
ノミナラス歐米諸國ノ學士及音樂家ヲシテ一見ノ下忽チ極東數萬里
外ノ我音樂ヲ悟リ容易ク之ヲ演奏シ且之ヲ研究スルノ途ヲ得セシム
ルノ益アルモノナリ是レ我音樂ノ始メテ世界ノ音樂中ニ列セラル、
ノ法ヲ得タルモノニシテ恰モ無文字ノ國民カ世界普通言語文字ヲ學
ヒ得タルカ如ク自今始メテ彼我音樂上ノ思想ヲ交通スルヲ得ヘキナ
リ

客年英國龍動府ニ萬國衛生教育博覽會ノ開設アルヲ機トシ本所取

調成績ノ一分ヲ陳列セシカ大ニ彼國諸學士ノ注意ヲ喚起シ「フエロ
ー、オフ、ロヤル、ソサイチー、オフ、ロンドン」ノ一人ナル學士
アレキサンドル、ゼー、エリス氏ノ如キハ「オン、ゼ、ミュージカ
ル、スケールス、オフ、ヴァリアス、ネーシヨンス」ト題セル冊子
ヲ著シ之ヲ著シ之ヲ同府ナル「ソサイチー、オフ、アーツ」ニテ讀
ミタリシカ特ニ本所取調成績申報書ヲ以テ引證トセリ惜ラクハ彼ノ
エリス氏ノ如キモ未タ自ラ眞正ナル日本音樂ヲ聞クノ機ヲ得サリシ
ヲ以テ漫ニ疑念ヲ生シ一二ノ點ニ就キテハ小官ト其說ヲ異ニスル所
ナキニ非スト雖トモ日本音樂論ノ一部分ハ本所ノ申報ニヨリテ解シ
得タル如シ且又彼氏ノ疑點ノ如キモ目今開會中ナル同國發明品博覽
會音樂部ニ本所ヨリ出陳セシ調音叉子ニヨリ大ニ釋然タル所アリシ
ナラン否今日唯今之ヲ研究シ居ルヤモ知ル可ラス又本所取調ノ成績
英國及白耳義ニ於テモ之ヲ一二ノ雜誌等ニ載セタリト云ヘリ

米國ルイジヤナ洲萬國工業兼綿百年期博覽會ニ於テハ本所取調成
績ハ大ニ同國人ノ貴重スル所トナリ「ニユーヨルク、トリビューン」
「ハーパルス、バザー」等數種ノ新聞ニ之ヲ記載シ爾後同國人ヨリ
特ニ申報書ノ寄贈ヲ乞ヒ來リタルモノ其數甚多ク一々其需ニ應スル
能ハスト雖トモ著名ノ人物ニハ更ニ之ヲ贈付シタリ

夫レ音樂ハ協同和音譜ヲ以テ其本旨トシ日本支那印度等ノ東洋諸
國ニモ其效果ヲ説キタルモノ少カラス又歐米文明國ニ於テハ古來其
調和ノ美德ヲ以テ殆ント神授ノ藝術トシ之ヲ愛重シテ措カサルハ諸
賢ノ夙ニ熟知セラル、所ナリ今ヤ此神聖平和ナル美術上進ノ機ニ遇
ヘリ自今世界各國ノ人ト共ニ其樂ヲ共ニスルヲ得ハ彼我ノ間大ニ同
感ノ情ヲ發起シ啻ニ交際上ニ裨益アルノミナラス我文化ヲ輔翼スル

ニ於テ豈効益ナカラシヤ謹テ本所事業ノ概略ヲ報シ以テ諸賢ノ聰聽ニ達スル事如此
 (明治十八年七月二十二日『官報』第六百十七號)

大木文部卿演述

音樂ノ起ルヤ人類ト其ノ舊ヲ同ウセルナルヘク爾來變遷進化シ以テ今日ノ隆盛ヲ致シ其ノ文化ヲ裨補スル一大要具タル事余カ言ヲ俟スシテ明ナリ夫音樂取調所創立以來日尙淺シト雖當該諸氏ノ能ク力ヲ致セルヲ以テ今ヤ第一回卒業證書授與ノ典ヲ舉クルニ至レリ是文化ヲ裨補スル一大要具ヲ備フルノ方ニ於テ端緒ヲ得タルモノト謂フヘシ抑技術ヲ修ムルヤ終身ノ業ニシテ僅々數年間ノ業ニアラス諸子夫今日ノ成ニ安セスシテ他日ノ大成ヲ期セラレヨ茲ニ聊カ一言ヲ陳シテ祝辭ニ代フ
 (『大日本教育會雜誌』第二十二号、明治十八年八月)

全科卒業生とは、一カ年の修業年限を終りその間の成績優秀な者は奨学金を得て見習生となり、三年間の研修をつむことができる。この過程を経た者を全科卒業生といった。しかしこの時の三名は、十七年から実施された四年制教科過程にもとづいて四年見習生として卒業している。次の表は三名の試験点数表である。

明治十七年二月音樂取調掛見習生期末試験點數表

93	93	98	唱歌
65	85	85	洋琴
89	90	99	箏
90	92	99	胡弓
89	93	95	和聲
85	95	95	樂史
90	97	98	風琴
		88	バイオリン
92	92	96	俗箏
693	737	853	計點
85,625	88,999	97,717	約點
市川道	遠山甲子 ^キ	幸田延	三年後期

明治十八年二月

第四年前期見習生期末試験點數表

92,5	92,5	97,5	唱歌 [○]
70	95	95	洋琴 [□]
92	94	99	箏 [○]
90	95	100	胡弓 [○]
91	95	94	風琴 [□]
95	98	100	専門箏教授法 ^{○△}
96	96	98	バイオリン [×]
		95	和聲 [△]
87	95	95	和聲 [△]
713,5	760,5	873,5	點計
89,18	95,06	99,28	點約
市川道	遠山甲子 ^キ	幸田延	

〔手書き〕(『音監回議書類』明治十七年~十八年)

(十六) 明治二十年二月十九日音樂取調掛最後の卒業演奏會

この日はオーストリア公使ザルスキー閣下、フランス公使シエンキウウイチ閣下、高崎東京府知事ら内外人五百人余りの來賓を迎えて卒業證書授与式ならびに演奏會が取り行われた。

管絃樂

メジテーション グノー氏作

卒業生一同

洋琴

ラ、チェーテレー メーエル氏作

木村 作子

グラランド、ワルス ゴバルト氏作

小山作之助

唱歌

君か代 四重音

生徒一同

寧樂の都

同

わかかな

同

箏曲

越後獅子

森 富子
幸田 延子
山勢 松韻

洋琴

二人連彈 白井規矩郎 ソーブレット
トロバドール ウエルデー氏作

エコー、ダメリキユー クレマー氏作 林 蝶子

バイオリン曲 洋琴合奏 バイオリン 森 富子

洋琴 林 蝶子

セレネード シューベルト氏作

洋琴 二人連彈 比留間賢八 納所辨次郎

ワイセ、ダーメ ボイルドー氏作

唱歌

ザオ、スター、オフ、
エブニング アプト氏作 卒業生一同

セレネード、オフ、
ンパスクエール ドニゼツタイ氏作 生徒一同

管絃樂 卒業生一同

シンフォニー ビートーベン氏作

唱歌 生徒一同

ほたる

プログラムはベートーヴェンの「シンフォニー」で閉じられた。この演奏は卒業生の数から推しはかってみると室内楽にアレンジされ、一つ

の楽章だけの演奏ではなかったかと言われている。いずれにしてもわが国にはじめて響いたベートーヴェンの「シンフォニー」であり、日本の音楽史に輝く記念すべき日であった。

卒業生 小山作之助新潟縣新潟縣 比留間賢八東京府 納所辨次郎東京府

内田久米太郎群馬縣 松本 長和和歌山縣 山本 生東京府 深澤登代吉

群馬縣 白井規矩郎東京府 倉田久太郎神奈川縣 倉知甲子太郎東京府

木村 さく東京府 森 とみ東京府 林 牒東京府 小木 友石川縣

卒業証書授与式には辻文部次官の祝詞と音楽取調掛主幹神津専三郎の報告が行われた。

辻文部次官の祝詞

諸子音楽取調掛の教科を修め今や其業を卒へたるを以て茲に卒業證書授與式を行ふ抑音楽は古來之を以て教化の一要件と爲し以て化育に資益し以て治道に裨補せし等其効用固より大なりとす然るに後世世俗音楽の効用を熟知せず或は單に一時娛樂の具の如く認めて深く注意せざるの情無きにもあらざりしか近時に及て音楽又漸く盛に行はれんとし學校の教科中多くは之を加へ世上亦往々其効用を知るに至れり此時に際して諸子の其業を卒へしは獨自ら榮とするに足るのみならず其得る所の業を實行すへき地も亦自ら乏しからすとせん宜しく奮て其技倆を盡し融々以て人の性情を涵養し洋々以て人の志氣を作興し以て音楽の効用を發揚せしむへし夫れ然り諸子の責任も亦輕しとせず乃今よりの後更に自修の功を加へ益其技を研磨せん

ことをこれ望む

音楽取調掛主幹神津專三郎君の報告

本日音楽取調掛第二回卒業證書授與式に際し内外朝野の紳士貴婦人其他の光臨を辱くしたるは獨卒業生の爲のみならずまた音楽取調掛の爲實に絶大の榮光とす謹て卒業生徒在學中に係る學事の一斑を進報し以て諸賢の清聽を瀆し併せて不肖か卒業生諸氏に望む所を一言すへし抑々本日卒業の生徒は之を分て二種とす一は見習生一は傳習生是なり見習生は即ち女生徒四名にして明治十五年四月の入學に係り其在學五ケ年に及ぶ者なり此生徒と同時に入學を許す者計十七人なり其十三人は種々の事故を以て中途退學に屬す傳習生は男生徒十名にして明治十六年四月の入學に係り其在學四ケ年に及ぶ者なり當時入學を許す者計十二人なり後種々の事故を以て退學する者四名にして殘る八名と明治十七年二月及七月の兩度に入學を許す者二名とを合せて今回卒業の十名とす右生徒か在學中に修むるところの學科は各相異なるところありといへとも今之を略述せんに唱歌、箏、胡弓、洋琴、風琴、バイオリン、フィオラ、フィオロンセロ、ダブルベース、音樂論、和聲學、音樂史、英語及倫理の數科とす而して專ら此諸科の教授に任せし者は上眞行、鳥居忱、辻則承、奥好義、多久隨、山勢松韻、瓜生繁子、エツケルト氏及ソープレト氏等の諸氏なり今回卒業の生徒は見習生を除き其他は孰れも明治十六年以降の募集に係り即ち本掛創置の際に在て盡力せられたる彼米國有名の樂師メーソン氏か既に去て國に歸るの後にして此生徒全體の薰陶は抑々前音楽取調所長伊澤修二君の力最も多きに居る

本日卒業の生徒に關する學事の一斑は先つ上述するか如し是より當に卒業生諸氏に望む所を一言すへし蓋し諸氏か今日を以て此處を去り社會に立て音楽者と稱するに至ては宜しく先つ我邦の社會と我邦の音楽者との關係を詳にせざるへからず即ち我邦從來の社會は音楽を以て酒宴遊興を相くるの具と爲し音楽を以て貴重なる光陰を徒消し貴重なる財寶を徒費するの具と爲すにすぎず甚たしきに至ては淫欲を培養するの具と爲すに至れりまた樂師か其音楽を勤むるの目的とする所も音楽をして此數件の要具と爲すの利用を長せしむるにすぎず是を以て樂曲の製作益々猥褻に流れ律呂の旋行益々淫聲を成すに至りしは勢の自然なり故に樂師は社會最下の地位を占め社會最賤の待遇を享くる者にして其情恰も社會は樂師の集合主人にして樂師は社會の共同奴隸の如し社會か此共同の奴隸を仕役するを以て其徳と爲し樂師か此集合の主人に奉事するを以て其榮と爲すこと相沿ふて風俗を成すに至りしは豈慨歎に堪ふへけんや然れとも凡そ天下の事物一として偶然に成るものなし其之をして然らむる所以のものなかるへからず今其原由を推究するに蓋し一も樂師の無學無文なるに坐せざるはなし適々社會の上流に立て世の人の望を繋ぐに足る地位を占むるものに音楽を勤めたる者なきにあらざるも此等は漸く此に耽けり此に沈溺したる者にすぎされは到底此音楽を以て性情を治め此音楽を以て徳性を涵養し此音楽を以て體育上の効を衛生學に徴するか如き人生至要の途に充てんことはまた絶て望むへからざるところなり尤も音楽を以て徳性を涵養し高尚の志想を通し高尚の行爲を激勵するの要具と爲したるは西國に於ても近代日耳曼のワグネルの如きか出て漸く之を稱道する所にして我邦の從來に於ては固より敢

て尤むるに足らざるところとす然りといへとも今熟々從來の樂師を歴觀するに技術は姑く措て問はさるも一として學識を具ふる者なきはまた甚しと謂ふへし不肖嘗て之を聞く壹岐判官知康は鼓を善し鼓判官の綽名を得たり然るに木曾義仲か曾て知康に云へるに足下は人に天窓を打たるを以て鼓判官とは世に呼はるなりやと罵詈せしとまた藤村檢校は三絃を善したるか毎に其云へる言に予三絃を演するに坐中の客に種々の趣向あり此方の氣韻に叶へは彼方の氣韻に叶はず故に予は技倆を盡して人を感動せしめんとは爲さず常に神に奉納するの意を以て之を演せりといへりとそ知康は専門の樂家に非すといへとも音樂に關する者の世に待遇を享くるの一斑を見るへし藤村は専門の樂家なりといへとも樂を奏するの精神約ね此類なり此二氏にしてなほ然り況や其他をや故に樂師に慷慨義烈とか忠勇愛國とか云ふ如き節操を立て名を竹帛に垂れんとするの精神を具有したる者は絶てあるなし英國にはブロンデルがリチャルト第一世に十字軍に從て歸路王の澳侯レオポルトに囚はれたるを償ひ救ふたる如きもあり支那には荆軻か謀破るゝに至て高漸離か筑を撃て秦始皇を劫したる如きもあり其他樂師の名を青史に留むる者少しとせず我邦に在ては皇極の朝中大兄の藤原鎌足と謀て逆臣入鹿を除かるゝ時俳優をして入鹿の劔を解かしむるの如きもあり元弘元年八月關東勢か上洛するに際し尊雲親王の建議に由て後醍醐天皇を南都へ潜幸のときに豊原兼秋か天皇の御輿を昇き奉りし如きあり樂師か天下の大事に與りたるは先此等にすぎず然れとも此等といへとも事皆偶然に出て故さらに勤めて此に及ひたるものにもあらざれば樂師の技術を以て事を擧げたと一般視すへからざるものあり約するに日本從來の樂師

は其業といひ事蹟といふも憫然に堪へざるものゝみと謂ふへし然るにブロンデルが一ケの琴を以て重囚の王を救ひ高漸離か一ケの筑を以て強國の王を侵す如きは千歳の下生氣凜然ともいふへき美事なり豈盛なりといはざるを得んや但し徳川治世の初めに大久保石見守か猿樂より出て天下の大政に與りたる如きもありといへとも徳川家康と大久保石見守と相投したるは實に千歳の一遇とも謂ふへくして我邦開闢以來殆ど其類例を見ざるところなり但し支那に於ては北齊の曹明達、安馬駒、五代の敬新磨その他の如きもありまた中には往々大膽不適の徒も少なからずといへとも殊に五代の變亂の如きは彼佛國革命の變亂と同じく例外にして論するに足らず且大久保石見守か出たるは天下の大政に與りたるも専ら財政の一事に止りて樂師の眞面目とする音樂を以て國政に與りたるにも非す又石見守は晩節を全くしたる者にも非されは此か爲に天下の音樂に影響を與へたるころ毫末もなし到底日本音樂の今日に至りしは日本樂師の其責を免かるへからざるところなり然りといへとも今方に此の如く一言に論下せば地下の樂師は之を聞て則ち日はん當時天下に音樂を教育するの道立たす啻に音樂を教育するの道立たさるのみならず普通教育の道もなほ未だ立たさる所にして西國の開花といへともまた未曾て我邦に入らざる所なり故に此等の學といへとも當時に在ては則ち皆盡善盡美のものにして未だ其淫猥なる所以を知らずと實に然り今時淫聲なりとするものも往時は即ち堂々たる雅聲にして往時の樂師か貴重したるはなほ今時の人のモザート、ビーターベン諸氏の作曲に於けるか如くなりしこと疑なし此等の樂師は惟其遭遇する時の古今を異にするか爲めに榮辱の至變を致し卒に後人の批判を免れざるに至りし

は豈また惜まざる可けんや然れども樂師か實際學問もなくまた自らも學問を勤めさりしはたとひ時勢とはいふといへとも何爲そ恥なきを得んや我邦音樂の事情は先此の如し之を約するに從來の音樂は不具不全にして野鄙を極め樂師は無學無文にして卑屈を極むるの甚たしき者と謂ふへし然れば則ち之を救はずして可なりや將た之を救ふの道なしとせん歟豈萬々其理あらんや是皆將來の樂師か當に負擔せざるへからざるところなり故に今日の音樂者は宜しく技術と學問とを兼有せざるへからず苟も樂師にして技術に欠く所あるときは固より論するに足らずといへとも其學問に欠くところあるもまた舊轍を履むの外なし然れどもまた樂師の技術のみを進めるも今日に於て決して望まざるところなり樂師は須く學問を基礎と爲し斯學問に由て技術を進め之を統ふるに德行を以てし斯三の者鼎立して始めて我邦に望む所の樂師たるを得へし諸氏の本掛に在るや限りある年月を以て限りなき學藝を修むる能はず故に今日此處を去て明日更に實地修業の學社に入り益斯三の者を研精鼎立せしめ以て其身を立るに至らは啻に一身の幸福を享くるのみならずまた今日の盛典に與るの大榮を全くするに庶幾るへし是れ不肖か諸氏に望て止まざる以所のものなり

〔大日本教育會雜誌〕第五十号、明治二十年二月

(十七) 明治二十年七月九日音樂取調掛演奏會

明宮殿下 (大正天皇の皇太子時代の宮号)、諸官省諸官吏、外国公使の臨席を仰ぐ。

音樂取調掛音樂演習會奏樂順序

第一部

- | | | | | |
|---|-------|------------|---|---------------------|
| 一 | 唱 歌 | 夏 祝 四部合奏 | 鳥居忱作歌
シー、グノー作曲 | 研究生等 |
| 二 | 管 絃 樂 | 懷古曲 | ジー、ダム作 | 第二年生一同 |
| | | 踏舞會招待曲 | ウエーバー作 | 同上 |
| 三 | 洋 琴 | 好伴侶曲 | 二人連彈 エフ、バイイル作 | 中島茂千代子 大久保鈴子 |
| | | 遊 獵 單音 | モザート作、エー、フラット、
シンフホニー中踏舞曲體ノ部
ジュールホッフ編 | 山田源一郎 |
| 四 | 唱 歌 | 庭ノ千草 複音 | | 第一年生一同
第一及第二年生一同 |
| 五 | 洋 琴 | セビラノ理髮工 獨彈 | ロジニー作 | 林 蝶子 |
| | | 軍人進行曲 二人連彈 | エフ、シユールベルト作 | 高木次雄 小出雷吉 |
| 六 | 唱 歌 | 保 昌 四部合奏 | | 研究生等 |
| 七 | 管 絃 樂 | 春花曲 | ジー、ソープレット作 | 同上 |
| | | 小品物曲 | ジエー、ストラウス作 | 同上 |

第二部

八 二部合奏唱歌 洋琴合奏

螢 獵 鳥居忱作歌

カンパナ作曲

高音 林 蝶子

中音 幸田 延子

九 洋 琴

幻想曲 イー、カーペンチーア作

洋琴 ジー、ソーブレット

十 唱 歌

獵人歌 四部合奏 エッチ、トムソン作 研究生等

十一 洋 琴

輪回曲 二人連彈 エル、ビートーベン作

木村作子 小木友子

十二 管 絃 樂

娘 シー、ルルー作 研究生等

演劇曲 トラビアーターノ序部 ジェー、ウキルデー作 同上

十三 バイオリン 獨奏曲

一器用合奏曲 レオナード作 ジー、ソーブレット

十四 唱 歌

將基ノ盤 男爵高崎正風作歌 研究生生徒等
上 眞行作曲

上の奏樂は何れも高尚の曲にして吾等記者のごとき辛ふじて小學唱歌の初歩を解するが如きものには得て委しく評論せらるべきことにあらずされど之を前會の演習會に比較せば其技の進歩せし程は明にして數多の研究生中には自ら樂器に長ぜられたるものもあり唱歌に妙を得たるものもありて大に内外人の聽衆を感動せしめたりまた

ギー、ソーブレット氏のバイオリン獨奏曲は流石に妙なる技術にてよしや音樂を耳と目とにて聽くものにては此曲には誰しも感動したるものの如く場内一時は静まりきりて耳を敬てたるは誠に同氏の能と申すべしソーブレット氏が音樂に妙を得たることは今に始めて聞きたることならねどかかる教師の我國に在るからは久しからずして日本に音樂の隆盛を期すべきことにして吾等記者も誠に末頼母しくこそ思ふなり

〔『教育時論』第八十一号、明治二十年七月〕